

Centaur Neue
セントール・ノイエ

—魔法少女リリカルなのは二次創作小説—

皆月蒼葉

かさり、かざりと落ち葉を踏みしめる音が耳をくすぐる。乾燥しきった黄色い葉は、四本足の動物の皮でできた靴によって、心地よい音を立てて折りつぶされていく。時おり小枝も踏みつけては、ぱきりと小さく爆ぜる音がした。頭の上には風が木々の間をかすめ行き、黄葉をかかささと震わせている。その音に合わせてか、梢こずえにとまった小鳥が澄んだ声で歌っていた。

この森にあるのはほとんどがウルメの木だ。丸っこく、ひどくギザギザした葉。背が低く、横へ横へと広がっていく変わった幹。どこか落ち着く、あたしの好きな木だ。

森の小道は石畳。大人二人がやっとすれ違えるほどの細い道だが、どうせここを通る人間などたかがしれている。なにせ、この道の続く先にあるのは一軒の「工房」だけなのだ。もの好きな老婆が経営する、おんぼろ魔導工房。

もう少し歩けば、家へとたどり着く。村はずれにある、レンガ造りの一軒家。姉や両親、ペットのイエオオカミが待つ、愛すべきあたしの家。村の人たちは「図書館」と呼んでいる建物。大きな大きなエシエの木の下にたたずむ、小さな小さな魔導工房。

木のドアを開けると、玄関で寝ていたらしいザフィーラがぴくりと顔を上げた。立ち上がり、

顔を足へとすり寄せてくる。

「あはは、待っててくれたのか？」

しゃがみ込み、ザフィーラの頭を優しくなでた。ザフィーラは心地よさそうに喉を鳴らして、頬をちろりと舐める。くすぐったさに笑い声を上げると、その声を聞いてか姉たちも部屋から出てきたようだ。

「お帰り、ヴェータ」

「もうすぐお昼ご飯よ。お婆さまがリビングにいらっしやいって」

言われてみれば、確かにリビングからいい匂いがしてくる。ヴルストの芳しい香り。いても立ってもいられなくなり、気がつけば薫香のする方へと一目散に駆けていた。

「こらヴェータ、まずは手を洗えと言ってるだろう！」

「もう洗ったよ！」

「嘘をつけ！」

呆れ半分に声を上げながら、姉たちもあたしの後を追ってリビングへと入ってくる。玄関に漂っていた香りはいよいよ強さを増して鼻と胃袋をくすぐり、あたしは待ちきれずに焦茶色の床板をどたどたと響かせながら中央に据えられたテーブルへと跳ねる。

「こらこら、そんなに慌てちゃ怪我するよ」

ずいぶんとしわがれた老婆の声。しかし温かく、どこまでも優しい声だ。婆ちゃんは車いす

に腰掛け、穏やかな表情で窓辺から外を眺めている。いつもの光景。なんだか心が落ち着くような、安らぎの時間だ。あたしは「へへへ」とはにかんでから、古めかしい木製の椅子へと飛び乗った。

テーブルの上には山と盛られたヴルストの大皿。褐色に輝き、沸き立つ湯気に乗った香ばしい匂いが、たまらなく食欲を刺激する。その脇にはこれも大量のプレートヒェンが籠に盛られ、その脇には色鮮やかなロートコール。酔の刺激的な香りも空腹を際立たせる。

「わあ、今日も美味しそうですね！」

上の姉シヤムルが喜色満面に手を合わせ、きらきらと目を輝かせた。普段は無愛想な下シゲナムの姉も、思わず顔をほころばせる。窓の外から聞こえる小鳥の声さえ、テーブルの上に並べられたごちそうを褒め称え、羨んでいるようだった。

「エルゼ、支度はできました」

言いながら、銀髪の女性がその長い髪をたなびかせて、キッチンから出てくる。両手で銀のトレイを持ち、その上にはシュパーゲルズツベが並んでいた。銀髪の声聞いて、婆ちゃんはゆっくりと頷く。

「ありがとうねえ、セレーン」

婆ちゃんが言うと、銀髪の女性——セレーンのはにかみながら首を横に振る。

「さあて。そうしたら、いただこうかねえ」

車いすに腰を下ろしたまま柔らかく微笑むと、婆ちゃんは車輪に手をかけゆつくりとテーブルへ向かった。それを目で追いながら、姉たちもそと席へと着く。

「天にまします我らが主よ、すべて見をなわす慈しみの主よ……」

目を閉じ、胸の前にダイヤモンドを切る。食事前の祈りの時。もちろん早く食べたいという気持ちもあるが、それでもこの時間だつてなんとなく好きだ。信心深い婆ちゃんはたつぷり十秒はかけてお祈りをする。あたしたちもそれに合わせて、目を閉じて婆ちゃんが長生きできますようにとお祈りを捧げる。食事前の穏やかな時間。

婆ちゃんの声がやんで、あたしたちも目を開ける。長い間光を遮られていた瞳に、きれいに並んだごちそうが眩しく輝いて目を焼いた。期待に胸を膨らませて息を吸い込みながら、手元に置かれたナイフとフォークをつかみ取る。冷えた銀がひやりと冷たい。

ヴルストをひとつ大皿から移動させると、ナイフをくいと押し当てて切れ目を入れた。ぷちり、とはじけるような音がして、脂のいい匂いが鼻先に広がる。小分けした一切れを口へと放り込み、ひと噛み。塩気と肉汁のうまみが口中に広がり、思わず頬が緩む。

「エルゼ、今日のヴルストはシグナムが作ったんですよ」

「おやシヤマル、本当かい。シグナムもずいぶんと腕を上げたねえ」

シグナムが照れくさそうに笑う。エルゼというのは婆ちゃんの名前だ。あたしは名前で呼ぶことはないが、シグナムやシヤマル、それにセレーン^{じい}は名前で呼んでいる。爺ちゃんはフリー

「ヴィータはなんか欲しいもんあるん？」

夕方近く、はやての部屋。ベッドにもたれかかり、ヴィータを後ろから抱きかかえながらはやてが尋ねた。12月の冷えた室内では、ヴィータの体温の高さが際立つ。ヴィータもまんざらではない様子ではやてに身を任せながら、首をだらりと上に向けて背後にあるであろうはやての顔を覗き込んでいた。

「欲しいものって？」

「ほら、もうじきあるやろ？」

そう言っではやてが指さした先、カレンダーには24日に赤い丸がつけられている。実際は十歳足らずというわけでもないのだが、それでもヴィータはありがちなおとぎ話を心から信じているらしかった。

「ヴィータは何をお願いするん？」

ヴィータの手首を掴んであやしながら、はやてが問う。なすがままに両手をぶらぶらと動かされながら、ヴィータはわずかに顔を赤らめる。

「んー、ぬいぐるみ、かなあ」

「のろうさか？」

はやてが聞くが、ヴィータは答えずに首を傾げてみせるだけ。手首から甲へと自らの手を滑らし、指を絡ませながらはやてが笑う。

「えー、いいやん教えてよー」

「うー、なんか恥ずかしいよ」

ヴィータも指をわずかに曲げて、はやてのそれと絡ませ合った。口元をぐにやりと曲げて、あからさまに困ったそぶりをしてみせる。だが、もちろんその様子は、肝心のはやてには見えていないのだが。

「教えてくれなもうご飯作っただげへんよー」

「ええっ、それはやだよー」

少し意地悪だったかな、とはやては思うものの、ヴィータがひどく素直な反応をしてくるので思わず笑ってしまう。うう、と小さく唸り声うなを上げてから、ようやくヴィータが口を開いた。

「……犬のぬいぐるみ」

「犬の？」

聞き返され、ヴィータは無言のままにこくりと頷くうなず。

「どんなのが欲しいん？」

「……青くて、白いたてがみがあった」

恥ずかしそうに、たどたどしく自らの希望するぬいぐるみを説明していくヴィータ。はやては再びくすりと笑い、意地の悪い笑みを浮かべた。

「あれー？ なんやその犬、見たことある気がするなあ」

ヴィータは何も言えず、口を尖らせて黙り込む。その様子があまりに愛らしく、はやては右手で頭をくしゃくしゃと撫でた。

人型の時は喧嘩ばかりしているが、狼の姿のザフィーラへの態度は溺愛といつていいほどだ。姿を模したぬいぐるみを欲しがるのも、無理からぬことなのだろう。

「ヴィータがええ子にしてたら、きつとサンタさんが持ってきてくれるよ」

「かなあ？」

不安そうに尋ねるヴィータに、はやてはいま一度頭を撫でて応えた。

暖房の入っていない部屋はずいぶんと冷え、時計の針音がよく響く。互いの息の音もはつきりと聞こえ、時間の進みの遅さを感じさせる。4時34分。窓の外は既に薄暗い。

「そろそろ晩ご飯の準備せえへんとなあ……」

けだるげにはやてがつぶやき、

「あたしも、ザフィーラの散歩行かなきゃ……」

言うものの、二人ともその場を動こうとしない。かちり、かちりという針の音だけがのん

びりと繰り返される。

「……散歩、行かへんの？」

「はやてこそ、料理しなきゃじゃん」

正論で返され、はやては困ったように小さく息をついた。わがままを言う子供のような、さやかな反抗の声。ヴィータだって立ち上がろうとしないのは、きつと同じ理由だ。

「だって、寒いねんもん」

時間が過ぎればすぎるほど、寒さが増していくのは容易に想像がつく。とはいえ、頭ではそう分かっているけど、今この場を立ち上がるのは相当な勇気が要る。はやては一度深く息を吐くと、覚悟を決めたように口を開いた。

「よし、そんなら、せーので一緒に立ち上がるか」

はやての提案に、ヴィータも腹をくくって深く頷く。

「よし。いっせーのーせー！」

言いながら、はやてがヴィータを抱きかかえたまま立ち上がる。と同時に、ふわりと起こった風が二人の足元をそよぎ、肌をひやりと冷ました。

「うわっ、寒、寒い！ 散歩行ってくる！」

ヴィータは勢いに任せて部屋を飛び出し、そのままどたと足音を鳴らしながら階下へと下りていった。一緒に下りるタイミングを逸し、はやてはしばし立ち尽くす。やがて、苦笑い

「はあっ！」

「やああっ！」

力強くも可憐な二つの喊声と、板張りの床を踏みならす音、振り下ろされる竹刀のしなる響き。冬の朝の底冷えした空気を、轟音が容赦なく引き裂いていく。

互いに正面を向き合って竹刀を構え、相手の剣先と瞳を見つめる。朝六時の剣道場には、二人をおいて他には誰の姿も見えない。一人は身の丈も小さく、灰色の袴を身にまとい、黄色い長髪を後ろにまとめている。もう一人はそれに比せば背も高く、赤袴をたすき掛けにして腰の近くまで桃色の頭髪を垂らしている。

二人とも、面や甲手をつけてはいない。かろうじて帯をつけているだけで、ほとんど生身の状態だ。型もルールもそこにはない。あるのは、打ち負かされるか打ち勝つかだけ。互いに自らの腕と相手の腕、そのどちらも信用できていなければ、やすやすとできる芸当ではない。

握る手に力と熱をこめながら、竹刀の先に相手の瞳を見据える。次に竹刀がどこへ動き、その次にどこに動かそうとしているかを読み合うように。剣先が左右に小さく振れると同時に、

互いの瞳も忙しなく動く。わずか数秒にも満たないにらみ合いは、無限の永さにも思えてくる。「いやああっ！」

先に動いたのは灰袴。右足を強く踏み抜き、一気呵成に間合いを詰めて正面から打ち下ろす。対する赤袴も早々に動きを見切り、竹刀を振り上げてつばぜり合いに持ち込んだ。竹刀を挟んで真向かいに互いの顔。吐息の音すら聞こえるような近さだ。

紺碧の瞳に映り込む緋色の眼。そこにもまた紺碧が映り込んでいる。竹刀越しに感じる相手の重み。時間にしてみれば1秒にも満たない拮抗。張本人にとつては、その何倍だろうか。

どちらからともなく間合いを離し、再び竹刀を正面に据えて互いを牽制し合う。赤袴の額にじんだ汗が、一筋白い頬を伝う。相手の剣先から意識を切らさないよう自らの竹刀で動きを追いながら、相手の垂にちらりと目をやった。白い楷書で「テスタロッサ」と刺繍されている。かつて命を賭して刃を交えた相手。鍛錬のための手合わせとはいえ、もしもまともに食らおうものなら怪我は免れない。おのずと凜然たる緊張が走る。

「どうしました、シグナム。やけに慎重だ。らしくない」

片笑みながら灰袴——フェイト・テスタロッサが言うが、炎の灯ったように赤いその瞳だけは少しとして笑うこともなく、食らいつくうように正面を見つめている。

「……できれば、無傷で終わらせたいからな」

「終わらせ」る？ へえ、勝つ気にいるんだ」

フェイトがくすりと笑う。大人しく内気な彼女の、もう一つの面。普段は決して見せることのない凶暴な笑顔に、シグナムは小さく苦笑した。得物を持ったフェイト・テスタロッサは、豹変する。瞳の中に紅蓮の業火をたぎらせて。

「テスタロッサがいくら強くても、私には勝てんさ」

言ってから一呼吸。浅い呼吸を整えようと、シグナムは無理やりに唾を飲み込んだ。

二人の足は地につきながら、剣先は互いを追い求めて宙を揺らめく。その動きはまるで、空中戦の二人のようでもある。上下左右にわずかに振れる剣先が、一瞬、カチリと音を立てて触れ合った。

次の瞬間。左足で床を強く蹴り、シグナムが動いた。上体を前傾させ、その勢いも従えて真正面に竹刀を打ち下ろす！

しかし、すんでの所でフェイトの竹刀が真一文字に掲げられ、シグナムの一撃を打ち払う。右上に腕をはじき飛ばされ、シグナムは大きく腰を伸ばした。そこにすかさずフェイトの竹刀が左から打ち込まれる。

「くっ!?!」

身をよじって左側へと飛び退き、フェイトの一撃を躲す。息を切らしながら竹刀を持ち直し、再び正面に構えた。

「残念、もう少しだった」

「ここで終わっては、つまらんだろう？」

強がるように返し、灼眼しやくがんを捉える。フェイトの口元が締まった。おそらくは、2秒後。

来た！ 猛然と間合いを詰めたフェイトが跳ね、大上段に構えた竹刀を袈裟けさ切りに振り下ろす！ シグナムが受けると次は逆袈裟に打ち込まれ、柄つかを握る手にじわりと振動が響く。

競り合いになった竹刀に体重を掛け、フェイトを押し飛ばす。同時に竹刀を返すと相手の足元へと回した。フェイトもその動きを目で捉え、真上に飛び跳ねて下段斬りをいなす。シグナムが顔を上げると、宙に浮いたフェイトが竹刀をあらん限り振り上げていた。落下の勢いを借りた兜割かぶとわりり。だが――

「遅いッ！」

地を這はわせた刀を素早く返し、頭の上に掲げる。宙に逃げてしまつては、そこからの攻撃は数が限られる。勢いに任せての兜割りか、あるいは――あるいは？

「しまっ……」

フェイトがにやりと笑う。その竹刀はわずかに右に傾き、斜めから振り落とされる！ その先にはシグナムの腕。ここは……いや、しかし間に合うか!? とつきの判断で刀を返す。そこに力の限りの一撃が打ち込まれ――

「……シグナムっ!?!」

袋竹刀の激しい音が、道場中に響き渡つた。

松明の月、13番目の日

体の調子がよくない。ここ数日、なにかと疲れを感じやすい。寒気も感じる。風邪でも引いただろうか。最近では急に寒くなってきたし、気をつけないといけない。明日はグイーたちちゃんと遊ぶ約束をしていたけれど、この調子だと難しいかも。謝っておかないと。

松明の月、15番目の日

風邪は治るところかひどくなる一方だ。おでこを触るとひどく熱く、思わず手を離してしまうほど。エルゼにもずいぶん心配をさせてしまった。咳は出ないので息苦しくないのだけが救いだけど、治るのはいつ頃になるのやら。シグナムたちに伝染さないようにしたいと。

ようやく、ようやく完成した。

長かった。本当に、本当に永かった。

声が聞こえる。穏やかな声。久しぶりに聞く、落ち着く声だ。ああ、そうか……ようやく、すべてが終わったんだな。私はゆつくりとまぶたを閉じる。私にはそれしかできないから。

聞こえるかい？ 聞こえているなら返事をしておくれ。

すぐ近くで声がした。私が目を開けると、安堵あんじょの息を漏らすような音が聞こえた。近くにいるのだろうか。私は再び、目を閉じる。

……ああよかった。お前もかわいそうに。こんな体になってしまって……。すまないね……。本当にすまなかった。